

クライストの『ペンテジレーア』について

清 水 純 夫

はじめに

ペンテジレーアはアキレスのみせかけの決闘要請に愛を裏切られたと激怒し、我を忘れ、獐猛な獣どもを引き連れてアキレスとの決闘の場に出向き、いわば夢遊病のような状態の中でアキレスを弓で射貫き、倒れたところを猛獣どもと襲いかかって引き裂き、八つ裂きにして彼を虐殺する。アマツォーネや司祭長みんなが、愛ゆえにはじめからペンテジレーアに負けるつもりのアキレスの本心を見抜くことができたのに、何故ペンテジレーアだけにそれができなかったのか。もしペンテジレーアにアキレスの真意を悟ることが可能であったなら、ペンテジレーアがアキレスへの怒りに駆られることも、夢遊病的状態に陥ってアキレスを殺害することもなかったはずである。だから何故ペンテジレーアはアキレスの真意を見抜けなかったのが問題の核心ということになる。

さらに、アキレスを殺した後、水を浴びて我に返ったペンテジレーアは恍惚状態に陥るが、裏切られたという一時の感情に駆られたとはいえ、愛しい男を殺害した直後にこのような状態に陥ることはやはり不可解だと言わざるをえない。その上、アキレス虐殺の事実とアキレスの真意を知った後もペンテジレーアは自責の念に駆られて取り乱すようなこともなく、ついに全く冷静に、精神力だけで自害して果て、作品は幕となる。

このように、極めて強烈な印象を与えるこの結末の場面にペンテジレーアの抱える全ての問題が凝縮されているように思われる。以下、この結末にみられるペンテジレーアの不可解な行為の意味について、アマツォーネ国家の由来と変質、並びにペンテジレーアのアキレスに対する愛の変遷を辿りながら考察し、解明を試みたい。

1

15幕においてペンテジレーアはアキレスにアマツォーネ国家の由来について詳しく語る。それによると、昔、スキュティアの民が平和に暮らしていたが、ある時エチオピアの王が軍を率いて攻め込み、老人や子供にいたるまで全ての男子を殺害し、女どもを辱めた。女王タナイスとエチオピア王の婚礼の日に、女王は油断した王を短剣で刺し殺し、それを合図に女どもも皆ベッドに寝ている男たちを殺して夫の仇をとり、彼女たちは再び自由を取り戻した。今や彼女たちは自由を守り、男の支配に屈しないために女だけの国家を作ることに決め、女神アルテミス(=女神ディ

アナ)を崇め祭り、タナイスをこの国の女王とした。そしてこの国を見た男はもちろん、国内に生まれた男児すら全て生かしてはおかないという厳しい掟が作られた。さらに男と闘っても引けを取らないように、女王は弓を引く際に邪魔になる乳房を片方引きちぎった。そしてアマツォーネたちは国家の存続と子孫維持のために男を求めて遠征し、闘いで征服した男をその種を宿すべく故郷に連れ帰る。

以上がアマツォーネ国家の由来の要約であるが、ここからこの国家の本質を規定することができる。それは男を全て敵とみなす男性不信に根差した国家であり、男性に対して全く排他的な、いわば父権制社会の真っ只中における女性の解放区であり、母権制国家とも言うべきものである。その国家の構成員たるアマツォーネたちは征服した男と寝るにしてもその男に対しては愛も抱かないし、男の人格を認めることもない。そして事がすめばその男を殺し、もし生まれた子が男であればその子も殺す。おまけに自分の肉体には片方の乳房が無い。これらはいずれも自然に反するものであろう。この自然に反することを掟が強いるのである。以上のことがアマツォーネ国家建設時点でのアマツォーネ国家の中味であり、アマツォーネたちのなしたことである。

2

しかし、それから長い年月を経て、この掟も形式を維持しながらも内容は変化してきた。一番大きな変化は、従来通り征服してさらってきた男たちの労をディアナの神殿でねぎらいながら、自分たちが妊娠するまで彼らを大切に扱い、その後は、殺すのではもはやなく、「私たちは王様に対するように彼ら皆に贈り物をし、成熟した母たちの祭りの日に彼らを立派に飾った豪華な馬車に乗せて、再び国へ帰す」⁽¹⁾ ようになったことである。別れに際し「多くの涙が流され、多くの心は暗い悲しみに襲われる。そして何故いつも真っ先に偉大なタナイスが讃えられなければならないのかがわからなくなっています。」⁽²⁾ とあるように、すでにタイナスの精神は忘れ去られ、男たちに対する女たちの態度も大きく変わった。

確かに愛に基づいて相手を選ぶことこそできないが、その後は相手に情を寄せ、いとおしく思ってもかまわなくなっており、生きて送り返していることなどから、男の人間の尊厳や人間性・人格を尊重するいわばヒューマンイズムがアマツォーネたちの間にすでに芽生えていることがわかる。男を単にもの、手段、とみる掟の精神は骨抜きになりつつあるのである。これは長年にわたりアマツォーネ国家が安定的に存続してきた結果であり、母権制社会が安泰で、女たちの主導権が保証される限りは男に寛大でありうる事情の反映であらう。

このような掟の変化・変質はペンテジレーアにも影響を与えずにはおかない。すでにペンテジレーアの母である女王オトレレにしてからが、臨終に臨んでペンテジレーアの相手の男としてアキレスを指名するという掟に反することをやっている。「軍神マルスの娘が自分の相手を捜し求めるのは相応しいことではない。神が戦場に連れてきた男を選ばねばならない。」⁽³⁾ というペンテジレーアの台詞からも、母もペンテジレーアも掟に反することを承知のうえで掟を破るのであ

る。

こうしてペンテジレーアははじめから母の求めに応じて天下一の英雄アキレスを求めて戦場に赴く。ペンテジレーアは、母権制が脅かされない限りは愛を無視する掟は時代遅れであり、もはや内容に形式が合致しえなくなったことを身をもって示しているのである。

戦場でアキレスと出会ったペンテジレーアは彼に心を奪われて夢中になる。そのため彼女は彼を手に入れるために異常なまでに勝つことに執着する。アキレスに勝てば掟どおり合法的に彼を手に入れることができ、私的な願望と女王としての打倒アキレスという公的な義務が両立しうるからである。そうなれば矛盾は表沙汰にならないですむ。だがアキレスを執拗に追い求めるペンテジレーアの中では彼女の意に反してますます私的・公的な両面の分裂がひどくなる。「彼が私の足元にはいつくばるのをみたい」⁽⁴⁾ という発言が女王としての立場に比重を置いた発言であるのに対し、「私が彼に対して剣を抜く時、何のためだと思えます。地獄に落とすためだとも思っているのですか。彼をただこの胸に引き寄せるためだけなのです。」⁽⁵⁾ や、「魅力の無い女であるよりは塵である方がまだましだ」⁽⁶⁾ という発言には私的願望が強く滲み出ている。

こうして、気持ちの揺れ動くペンテジレーアはついにアキレスと対決し、そして敗れる。しかし彼女に一目ぼれしたアキレスは彼女に自分の方が敗れたと嘘をつく。アキレスに勝ったと思込み、喜んだペンテジレーアは愛を告白する。今や彼女の中では公的義務と私的願望はどちらも充たされる。そして一緒に自分の故郷へ行こうと誘う。ここはペンテジレーアの愛と心の美しさの際立った場面である。

しかしペンテジレーアの愛については慎重に捉える必要がある。それはその後の経緯をみれば当然である。

愛の陶酔に浸るペンテジレーアのもとヘギリシア軍が、そしてそれに続いてアマツォーネ軍が駆けつけてきて、ペンテジレーアに勝ったのがアキレスだったことが明らかにされる。そしてペンテジレーアもアキレスも引き離されて、それぞれの陣営に連れていかれる。

3

自分を救ってくれたとはいえ、結果的にアキレスと自分を引き離すことになったアマツォーネたちの勝利の勝鬨を呪うペンテジレーアのもとに、アキレスからの再度の決闘の申し入れの使者が来る。それを聞いたペンテジレーアは、「彼と競うには私が弱すぎることを承知で、彼は決闘するために私を戦場に呼び出しているのか。この胸の誠は彼の鋭い槍に砕かれないうちは彼の心を動かせないのか。私が彼にささやいたことは彼の耳には音色としてしか響かなかったのか。」⁽⁷⁾ 「それならば彼に立ち向かう力がわいてきた。たとえラピテス族や巨人族が彼の味方をしようとも彼を打ち負かしてやる。」⁽⁸⁾ と言って逆上する。そしてペンテジレーアは象や猛犬の群れを率いて決闘の場へ行き、はじめから闘うつもりもなくわざと彼女に負けて彼女のいいなりになるつもりだったアキレスを虐殺する。

冒頭でも問題提起したように、ここにペンテジレーアの愛の本質がみてとれる。即ち、タナイスの流れを汲むペンテジレーアの愛は相手に勝った時のみ勝者として相手に与えることが許される愛である。このように腕づくで相手をものにすることに基づく愛は相手に対する思いやりに欠けた、自分本位で、自己満足的なものである。それは太古からの男性不信に根差す利己的な愛で、それがいわば集団的無意識のようにペンテジレーアの意識の底を流れている。だからペンテジレーアには相手のために尽くす献身という発想はみられない。愛する者のためにすすんで負け、身を委ねるといふ発想が無い。この発想が無いためにアキレスの真意を見抜いたり、理解することができないのである。

ゲーテがスピノザに見いだした無私の愛と、それを作中人物に言わせたことに関して、ゲーテは晩年に『詩と真実』の中で次のように述べている。

「私を特にひきつけたのは、どの文からも光り輝いている彼の限り無き無私であった。『神を真に愛する者は神が愛に応えてくれることを求めてはならない』というあの驚くべき言葉は、その基礎となる全ての前提とそこから生じる全ての結論とともに私の頭を一杯にした。全てに無私であること、愛と友情に最も無私であることは私の最高の願いであり、行動の原則であり、実践であったので、『私があなたを愛してもそれがあなたに何の関係があるの』というあの大胆な言葉は、まさに私の心から発せられたものである」⁽⁹⁾

ここでゲーテが言っている返しの愛を求めない無私無欲の愛は、今のペンテジレーアにはまだ無縁なものなのである。タナイス同様、人間不信が根底にあるペンテジレーアの利己的な愛は返しの愛を求める愛である。これがペンテジレーアの愛の本質である。

だからアキレスの決闘の申し入れを聞いたペンテジレーアの中では、男性不信が容易にアキレスにも向けられて、彼女は愛が裏切られたと勘違いしてしまう。愛の基盤が脆く、揺るぎない確信に裏打ちされていないから、すぐに裏切られたと思違いするのである。

さらに自分の愛が返しの愛を呼び起こさなかったこと、無力だったこと、で激しい怒りがこみあげてくる。本来ならば悲しみを感じてもおかしくないところに怒りだけを感じるのがペンテジレーアの愛の異常なところである。

同時に、アキレスの見せかけの挑戦を、強い男がペンテジレーアの弱さを承知のうで本気で挑戦している弱い者いじめの卑劣な行為、と受け止めるペンテジレーアは、その挑戦に母権制国家・アマツォーネ国家への脅威を感じとる。それゆえペンテジレーアの中では、エチオピアに攻撃された時と同じ太古の怒りもよみがえる。

このようにペンテジレーアの怒りは、ペンテジレーアの愛が男性不信に基づく利己的な愛、即ち、返しの愛を求める愛であったこと、自分の愛が相手に無力だったこと、そして女王としてアキレスの挑戦に太古の攻撃の脅威を感じたこと、に起因する。⁽¹⁰⁾

今やヒューマニズム、愛、個、の感情がペンテジレーアの中ではすっかり消え去り、彼女はタナイスの魂が乗り移ったかのように夢遊病的状態に陥り、掟の原点に立ち返る。ついにペンテジ

レーアは女神アルテミスにならった行為にでる。

ギリシア神話によれば、女神アルテミスは自分の水浴を偶然覗いた若者を怒って鹿に変え、彼の猟犬に虐殺させた。⁽⁴¹⁾ここではアキレスがその若者にあたる。八つ裂き直前のアキレスを「若い鹿」⁽⁴²⁾に譬えたペンテジレーアの部下の発言や、「隠れても鹿の角が居場所を教える」⁽⁴³⁾と言うペンテジレーアの発言がそれを裏付ける。誠を破り、ペンテジレーアを辱めたアキレスに対する彼女の異常な怒りと虐殺行為はまさにアルテミスのそれと重なる。

ペンテジレーアの残忍な行為をはじめは嫌悪した司祭長やアマツォーネたちは、ペンテジレーアが弓を落とすのをみて、彼女の行為が女神アルテミスの意に適ったものであり、掟に忠実なものであったことを悟る。⁽⁴⁴⁾ペンテジレーアの行為はタナイスにもまして女神ディアナの意向を体現していたのである。

今やアマツォーネたちは自分たちがいつしか掟の原点を見失っていたことに気づく。このことは取りも直さずアマツォーネたちの中では時の流れとともにタナイスの精神が忘れ去られ、掟が形骸化し、すでに彼女たちがヒューマニズムに侵されていたことを示している。先の引用(1)と(2)はそのことを端的に示している。しかもこの形骸化の方が実は自然に適ったことであり、掟の方が自然に反するものであること、そしてそれゆえアマツォーネ国家の解体が不可避であることがペンテジレーアの行為から明らかにされる。

水を浴びて意識を取り戻したペンテジレーアは、恍惚状態にあって次のような台詞を口にする。

「もうこれで思い残すことなく死ぬそうだ。ここでこの身に起こったことは知らないけれども、アキレスに勝ったという確信ゆえにすぐにも死ぬことができそうだ」⁽⁴⁵⁾

このことはペンテジレーアが掟に従ってアキレスと闘い、勝ったことで、掟を守り、女王としての使命を果たしぬいた満足感に浸っていることを示していると思われる。燃焼しきった感じでもあり、もはや思い残すことは何も無いという充実感であろう。それはタナイスと同じ水準の満足感であろう。だから今度は個人として愛に殉ずることが許されると考える。死がほのめかされているのは、掟の彼方で死んだアキレスと一緒にしようとするペンテジレーアの願望の現れと解すべきであろう。

だが、無残なアキレスの屍を見て、それが自分の仕業と知ったペンテジレーアは、「キス(Küsse)」と「嘔み付くこと(Bisse)」を取り違えたと言う。しかし不信に根差した凶行を、キスと嘔み付くことの「韻が合う」⁽⁴⁶⁾がゆえに犯した取り違えにすぎないと思い、「食べてしまいたいほど可愛い」⁽⁴⁷⁾という世の恋人たちの口にする台詞を文字通り実行したのだと言うペンテジレーアの弁解にもかかわらず、この取り違えは相手への無私の献身の愛ではなく、自分本位の身勝手な愛がその本質であったペンテジレーアの愛と、夢遊病的状態の中でペンテジレーアの意識を支配している、アマツォーネ国家を脅かす敵を倒さねばならないという女王としての公的な義務がペンテジレーアの内部に同居していることによって、起こるべくして起こったことといえる。即ち、ペンテジレーアの愛の次元では Küsse と Bisse は本質的には同じだということをこの事

例は示しているのである。

しかしペンテジレーアはアキレスの真意を知らされて今や無私の献身の愛を知る。アキレスの犠牲により新しい愛に目覚めたペンテジレーアはその愛に殉じることを願い、そしてその愛とは相容れない掟を撤廃するために、アマツォーネたちに掟からの解放とアマツォーネ国家の解体を伝え、自分は彼岸でアキレスと和解し一緒になるために自害する。それも武器を用いてではなく、全く精神力だけで自分の命を断つ。

新しい愛に目覚めてもアキレスがすでに死んでしまった以上、ペンテジレーアは彼岸でしか彼との愛を貫けない。だがペンテジレーアはその愛を貫こうとする。「私はこのひとのあとを追います」⁽⁴⁸⁾ という彼女の台詞や、写本の異文における「彼を待たせるわけにはいきません。彼はもう偉大な女神ディアナのところにいるではありませんか。」⁽⁴⁹⁾ という台詞はペンテジレーアの決意を示している。愛に殉じようとするこの堅い決意が精神の異常な集中力をもたらし、精神力だけによる前代未聞の死に方を可能とする。

こうして愛の意味を、それも利己的な愛ではなく、返しの愛を求めない献身的な愛の意味をペンテジレーアは身をもってアマツォーネたちに示した。それゆえ、アマツォーネ国家を解体して、それにかわる愛に基づく国家を作れというのがペンテジレーアの遺言だともとれるのである。

こうしてみると、そもそもタナイスからペンテジレーアに至るアマツォーネたちに共通した、父権制社会の矛盾、という認識は正しかったが、その矛盾との闘い方が間違っていたと言えよう。男性全てを敵にまわしての闘いではなく、ヒューマニズムと愛に基づく男性との連帯を通しての闘いが必要だったのである。

おわりに

クライストが『ペンテジレーア』を完成したのは1807年であり、1789年のフランス革命の影響の大なる時期のことである。S. Scheifeleによると、フランス革命のさなかに女性による自由・平等を求める解放運動が起き、その中心的な女性は自らをアマツォーネと称して果敢にデモなどを行った。しかしその行き過ぎに対する恐れと女性の残酷さを示す事件などが起きたことから、男女同権への危惧の念が強まり、1793年には集会の自由も剥奪された。このように、女性たちの過激な行動に対してはフランスの貴族のみならず革命家たちも批判的であった。こうした事情をクライストが知っていたことは確かで、彼もこの女性たちに批判的であった、そうである。⁽²⁰⁾

このことが『ペンテジレーア』創作のクライストの動機の1つであったとすると、排他的母権制のアマツォーネ国家に似たフランス革命の女性運動にクライストは権力を握った女性による逆差別の危険な匂いを嗅ぎ取ったのかも知れない。それゆえ、アマツォーネの逆差別・排他主義的な掟と国家の建設と崩壊を描いたこの作品はフェミニズム運動のあり方に一石を投ずるものであると言えるかもしれない。

注

テキストは Heinrich von Kleist: Werke und Briefe in vier Bänden. Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 3. Aufl., 1993. を使用。(以下K. W. と略す。)

- (1) K. W. S. 82.
- (2) *ibid.*, S. 82.
- (3) *ibid.*, S. 84.
- (4) *ibid.*, S. 29.
- (5) *ibid.*, S. 48.
- (6) *ibid.*, S. 51.
- (7) *ibid.*, S. 93.
- (8) *ibid.*, S. 94.
- (9) Goethes Sämtliche Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 10, 4. Aufl., 1966. S. 35.
- (10) E. Irlbeck は「闘いはもはやアマツォーネの愛のための征服ではなく、拒絶された愛に対する復讐である」と述べているが、アキレスの挑戦をアマツォーネ国家に対する攻撃とみる視点の欠如したこの見解では、ペンテジレーアが太古の怒りとらわれる説得力に欠ける。
Irlbeck, Eva: Tragödien der Freiheit. Das Problem der Freiheit im dramatischen Werk Heinrich von Kleists. Frankfurt am Main 1986. S. 138.
- (11) マイケル・グラント／ジョン・ヘイゼル共著，西田 実他訳，『ギリシア・ローマ神話辞典』，大修館書店，第7版，1994年，93頁 参照。
- (12) K. W. S. 104.
- (13) *ibid.*, S. 104.
- (14) 神話と掟とペンテジレーアの関係については広瀬千一氏の論文「クライストの『ペンテジレーア』——ペンテジレーアの罪の問題を中心に——」(阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」16号，1974年。)が大変啓発的である。
- (15) K. W. S. 113.
- (16) *ibid.*, S. 118.
- (17) *ibid.*, S. 118.
- (18) *ibid.*, S. 119.
- (19) *ibid.*, S. 542.
- (20) Vgl. Scheifele, Sigrid: Projektionen des Weiblichen. Lebensentwürfe in Kleists Penthesilea. Würzburg 1992. S. IX-XI, S. 45.